

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	B型肝炎	Transfusion 49(12): 2774-2776; 2009 December	日本人献血者のB型肝炎セロコンバージョンについて調査を行うため、2006年10月-2007年9月にHBs抗原がセロコンバージョンを起こした献血者48名を特定し、最後に血液が陰性であった時点から最初に陽性となるまでの期間につき、年齢、性別、HBV遺伝子型およびIgM型抗HBc抗体によって分析した。中央値は332日でこれまでの報告よりも長く、他国との献血基準の違いが考えられた。また、中央値はHBV遺伝子型によって異なり、GenotypeA(いずれもAe)献血者では161日、GenotypeB献血者では602日、GenotypeC献血者では357日であり、実際の日数を献血可能期間で除した場合、GenotypeAの比率はGenotypeCより有意に低かった。
2	B型肝炎	FDA/CBER Guidance for Industry 2010 May	2010年5月、FDAは抗HBc抗体の検査の結果、供血延期となった献血者の再登録に関する再検証方法について、ガイダンスを発表した。 A. 抗HBc抗体が2回以上繰り返し陽性のため、供血が無期限に延期となった献血者については、1)繰り返し陽性反応の最後の検査から最短8週間後の当該献血者の追跡検体において、FDA承認の検査で、HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATが陰性である場合、及び2)当該献血者の献血前の血液検体において、FDA承認の検査で、HBs抗原、抗HBc抗体及びNATが陰性であり、当該献血者が全血及び血液成分の献血者として適合基準に全て適合している場合、ドナープールに再登録できる。 B. 抗HBc抗体が2回以上繰り返し陽性のため、供血延期となった献血者の検体もしくは献血検査が 1)HBs抗原検査で繰り返し陽性である 2)抗HBc抗体検査で繰り返し陽性結果である、又は 3)HBV NATで陽性である場合には、その献血者の供血を無期限に延期しなければいけない。 C. 抗HBc検査結果によって供血延期となった献血者に追跡検査の実施を希望する場合、8週間の待機期間が終了する前に、追跡検査を実施してよい。HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATのすべてが陰性結果である場合のみ、再登録の資格を得る。8週間の待機期間中に、HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATのいずれかの結果が陽性の場合、再登録は不適合であり、供血を無期限に延期することを推奨する。
3	E型肝炎	XIVth Regional Congress of the ISBT, Asia; Nov 14-18, 2009; Nagoya (International Society of Blood Transfusion Vox Sanguinis 2009; 97, 17) (2A-S02-03).	HEV (hepatitis E virus) 陽性血液の輸血を受けた受血者のルックバック調査から、血液製剤中のHEV高値(>5.4log/bag)がウイルス伝播に関連付けられると考えられた。日本赤十字社では北海道においては、HBV/HCV/HIV-1に加えてHEV NATスクリーニング検査を行っているが、2005年1月-2006年3月には検査結果が判明する前に輸血が行われた場合があった。過去の供血保管検体のルックバック検査により、HEV陽性血液製剤の輸血を受けた13例が判明したが、HEV感染の徴候を示した4例中3例がE型肝炎を発症し、1例は一過性のATL上昇を示した。輸血された4製剤のHEVウイルス量とgenotypeは5.4(G4), 5.5(G3), 5.8(G4), 6.8(G3)log/bagであり、HEV感染を起こさなかった4例へ輸血された4製剤では、<4.4(G3), <4.4(G3), 4.3(G4), 5.5(G3)log/bagであった。genotype4は3より毒性が高い可能性が示唆された。
4	E型肝炎	日本ウイルス学会第57回学術集会(2009 October 25-27)1P153	サルにおけるE型肝炎ウイルス(HEV)の感染状況を調べるため、2004-2008年にマカク属サル9コロニーから定期検査において採集した血清535検体を用いて、HEV特異抗体検査および(HEV陽性の場合)nestedPCRを用いたHEV遺伝子の検出を行った。HEV抗体は、2004年採集については検出されず、2005年採集では計25頭のサルからHEVIgG抗体が検出され、2006年採集では抗体が検出されなかった1群以外は陽性を示し、全体の抗体保有率は79%に達した。2007年のIgG抗体の高い検体につき遺伝子検査を行った結果、3検体からHEV遺伝子を検出し、遺伝子型はいずれも3型であった。過去5年間の観察結果より、HEVは自然環境でもサルに伝播し、最初の感染は2004-2005年に発生し、他のコロニーへ伝播したことが推測された。
5	HTLV	XIVth Regional Congress of the ISBT, Asia; Nov 14-18, 2009; Nagoya (P-141) (International Society of Blood Transfusion Vox Sanguinis 2009; 97 (suppl.1) 119)	HTLV-1 (Human T-cell lymphotropic virus type 1) 抗体陽性献血者のプロウイルス量の定量と輸血感染症の感染性ウイルス量の評価について報告された。プロウイルス量はHTLV-1抗体陽性献血者から白血球除去前に採取した血液検体の末梢血単核細胞または凝固血液由来DNAを用い、TaqManPCR法によって細胞内DNA量として定量された。輸血感染症の感染ウイルス量は、過去のデータで抗体陽性献血者由来の赤血球濃厚液1単位の輸血を受けた患者の約80%にセロコンバージョンが認められたことから、血液検体の80%に感染リスクがあると仮定し、推定された。その結果、HTLVプロウイルス量は白血球100細胞あたり0.01~4.9コピー(平均0.83)であり、評価された血液検体の80%に、少なくとも白血球100細胞あたり0.06コピーのHTLVプロウイルスが含まれていた。赤血球濃厚液1単位あたりの白血球数を $1 \times 10^9$ 数(白血球除去前)と仮定すると、輸血感染を生じた製剤には少なくとも $6 \times 10^5$ 数の感染細胞が含まれる。2007年、日本の全血液製剤に対して保存前に白血球除去が実施され、99%の製剤において、残存白血球数は $1 \times 10^6$ 数と確認されている。仮に血清学的スクリーニングが未実施の場合でも、血液成分中のHTLV-1感染細胞は多くて $4.9 \times 10^4$ 数と考えられ、推定される感染ウイルス量はかなり少ない( $6 \times 10^5$ 感染細胞)ことから、血清学的スクリーニングと白血球除去によって事実上輸血感染リスクは排除されていることが示されたと説明している。

6	HTLV	51st ASH Annual Meeting and Exposition; 2009 Dec 5-8; New Orleans.	長崎市におけるHTLV-1 (human T-cell lymphotropic virus type 1)の感染率とATL (adult T-cell Leukemia/Lymphoma)の発症率を、(献血者からではなく)2000-2007年に長崎大学病院を受診した患者(10,261名)のHTLV-1抗体検査データおよび長崎県がん登録された長崎市内で診断を受けたATL患者(360名)のデータから評価した。その結果、患者10,261名中HTLV-1抗体陽性者は1,392名(男性:653、女性:739)、陽性率は13.57%であり、女性が有意に高かった。HTLV-1キャリアの大きな生涯ATL発症リスクは男性7.29%、女性3.78%と推定され、また、出生年別の抗体陽性率および年間HTLV-1キャリア推定人数からキャリア10万人当たりの年間ATL発症率を推定した。本調査の出生年別HTLV-1抗体陽性率は過去に報告された供血者の陽性率と比べて約50%高く、また、過大評価の可能性はあるが、長崎市において高齢者のHTLV-1キャリアの大規模集団が存在することが示唆された。
7	レトロウイルス (XMRV)	PLoS ONE 5(1): e8519. doi:10.1371/journal.pone.0008519.	2009年10月に米国で報告されたCFS (Chronic Fatigue Syndrome)患者101名のうち68名に(これまで前立腺癌との関連が示唆されている)新規ガンマレトロウイルスXMRV (xenotropic murine leukemia virus-related virus)を検出した知見を受け、英国においてCFS患者186名の血液試料からDNAを抽出し、nestedPCRによりXMRVのスクリーニングが行われた。DNA調整の品質確認には細胞内β-グロブリン遺伝子が増幅され、またネガティブコントロール(水)およびポジティブコントロール(XMRV感染分子クローン)も実施された。186例試料すべてにおいてβ-グロブリン遺伝子は増幅されたが、XMRVおよび(関連性の高い)MLV (murine leukemia virus)は検出されなかった。英国においてはCFSとXMRVの関連を示す証拠は見つからなかったが、北米と欧州ではXMRV有病率に集団差がある可能性があり、(これまでに)二つの米国グループは前立腺癌組織にXMRVを検出し、二つの欧州の研究では検出されなかった事実もこの可能性を説明するかもしれない。
8	レトロウイルス (XMRV)	ProMED-mail 20100406.1100	XMRV (xenotropic murine leukemia virus-related virus) とCFS(chronic fatigue syndrome)との関連については、健常人の血中に測定可能なレベルでXMRVが検出されている一方で、他の研究ではCFS患者の血中からXMRVは検出されず、いかにウイルスが伝播するか、XMRVが病気の原因であるかは不明である。ウイルスを検出する有効な検査を見つけ、有病率を決定するために努力がなされ、(FDAやCDCなどの政府機関と共に)NIH(National Institutes of Health)のワーキンググループによって調査中である。現在、12の検査が血液供給への感染因子混入を防ぐために行われているが、XMRVを検出するためのFDAに承認された検査はなく、診断基準を設定中である。
9	レトロウイルス (XMRV)	BMJ 340 2010 April 17 (c1974)	カナダでは、CFS (Chronic fatigue syndrome:慢性疲労症候群)の既往歴のあるヒトからの供血を予防措置として2010年5月から禁止することが公表され、この措置を執るのはカナダが世界で初めてである。この決定には、2009年10月に発表されたCFSとレトロウイルス (XMRV: xenotropic murine leukemia virus related virus)との存在に関連性を示唆した報告(Science 2009;326:585-9)が引用され、この試験ではCFSの患者から血中単核細胞を調査した結果、患者群では101例中68例(67%)にXMRV由来DNAを検出し(健常者対照群では218例中8例(3.7%))、また、患者由来のXMRVは感染性があり、ウイルスを介した感染および細胞性感染の両方の可能性が示された。更には、CFS患者由来の活性化PBMC、B細胞、T細胞もしくは血漿に曝露された後、非感染初代培養リンパ球および指標細胞培養系には二次感染が認められたことが、XMRVがCFSの一種原因因子である可能性を示唆する根拠となっている。しかし、このウイルスが実際に患者においてCFSの原因となっているか、ウイルスは正常(intact)で感染能力があるのかは不明であり、特に供血システムへのリスクについては不明のままである。XMRVが更に解明され、CFSや関連疾病におけるウイルスの関与についてより理解されるまで、今回の供血延期を介した血液供給の安全措置を行うが、更なる知見が集まった時点で、この無期限の供血延期の正当性をもう一度判断する。
10	インフルエンザ	日本ウイルス学会第57回学術集会 (2009 October 25-27) p.177 2A01	タイ国中央部(3県7農場)におけるブタインフルエンザウイルス(SIV)の浸潤状況を調査する目的で、临床上健康なブタから血清および鼻腔ぬぐい液を採取し、それぞれH1N1・H3N2亜型SIVに対する抗体保有率およびSIV分離・塩基配列決定を調べた。肥育ブタからH1N1亜型ウイルス1株、子ブタからH3N2およびH1N1亜型ウイルスが各々1および3株分離され、いずれも2000-2005年にタイで流行したSIVと近縁であった。また、母ブタ群の抗体保有率は1年を通して他群(肥育ブタ・子ブタ)より高く、母ブタが農場内の循環に関与している可能性が示唆された。
11	インフルエンザ	ProMED-mail 20091022.3635	大阪におけるパンデミックインフルエンザH1N12009:発生日 2009年10月2日、最初の確定日 2009年10月21日、報告日 2009年10月21日、原因 パンデミックインフルエンザH1N12009。2009年10月2日に大阪でパンデミックインフルエンザH1N12009のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ1000頭、確定例はブタ10頭、死亡例0頭であった。日本でブタがパンデミックインフルエンザH1N12009に感染した最初の報告である。臨床症状を示さないブタから無作為にブタ鼻腔スワブ10サンプルが集められ、そのプールからウイルスが分離され、サブタイプH1およびN1が確認された。農場は(ブタの)移動を自粛し、半径10km以内のブタに異常は認められていない。

12	インフルエンザ	Virology Journal 2009; 6: 180 (doi: 10.1186/1743-422X-6-180)	2008-2009年冬にスウェーデンで最初にH1N2ブタインフルエンザが診断されたが、そのブタ群からH1N2サブタイプインフルエンザウイルスのリアソータントを特定した報告である。ヨーロッパH1N2ブタインフルエンザウイルスの殆どはこれまで、ヒト様H1N2 SIVのHA (haemagglutinin)とヨーロッパH1N2もしくはH3N2SIV様ウイルスのどちらかのNA(neuraminidase)を保有しているが、このスウェーデンで分離された株はトリ様SIV HAおよびH3N2 SIV様NAを保有している。このH3N2 SIV様NAは、ドイツ分離株に認められる過去10年間に分離されたH1N2ウイルスの起源であるH3N2のNAと比べ、80年代初期に分離されたH3N2 SIV NAにより近く、両者は独立してNAを獲得したことを示唆している。このウイルスの内在遺伝子(internal gene)は、トリ様SIV H1N1起源であることが示された。
13	インフルエンザ	ProMED-mail 20100116.0189	米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)は2010年1月15日に、新しいブタインフルエンザによるヒト感染例を報告した。アイオワ州の小児は2009年9月にブタインフルエンザウイルスH3N2に感染したが、11月まで表面化しなかった。少年は入院も必要とせず、十分に回復した。本例ではウイルスの広がりはなく、また、ヒト-ヒト間の感染を疑う根拠はなかった。当該少年が感染した経緯は不明であり、ブタとの接触は知られていない。
14	インフルエンザ	ProMED-mail 20100302.0689	中国香港大学は定期インフルエンザウイルスサーベイランスでブタインフルエンザウイルスとパンデミックH1N1ウイルスのリアソータントを検出した。当該サーベイランスでの検出は初めてであるが、世界中で同様な検出がされている。また、このリアソータントはヒトでは検出されておらず、現時点では香港の集団には出現している兆候はない。引き続き、養豚場の監視およびブタの健康状態のモニターが続けられる。
15	インフルエンザ	Bloomberg News (2009 September 29)	オーストラリアおよびニュージーランドの医師は、ブタインフルエンザ感染の最も危険な状態は、感染によって肺に炎症が生じ、液体が貯留し、機能不全になった場合であることを見出した。ウイルスに感染しても命の危機に瀕する疾病に発展するヒトは少数であり、パンデミック株に由来する三大合併症の最大の共通点には、インフルエンザA関連急性呼吸器疾患候群もしくはflaardsであると説明した。Flaardsは多臓器不全と関連することもあり、死亡と最も高い関連がある。Flaardsに罹る多くの患者は若者でこれまで健康であり、オーストラリアでは、季節性インフルエンザによる死者の年齢中央値は83歳であるが、新型H1N1ウイルスでは51歳であると報告された。
16	インフルエンザ	Canadian Press (2010 January 15) (Yahoo news )	米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)は2010年1月15日に、新しいブタインフルエンザによるヒト感染例を報告した。アイオワ州の小児は2009年9月にブタインフルエンザウイルスH3N2に感染したが、11月まで表面化しなかった。少年は入院も必要とせず、回復した。本症例ではウイルスの広がりはなく、また、ヒト-ヒト間の感染を疑う根拠はなかった。当該少年が感染した経緯は不明であり、ブタとの接触は知られていない。
17	インフルエンザ	ProMED-mail 20100305.0734	「季節性インフルエンザウイルスのヘマグルチニンとノイラミナーゼを含む3種再集合体ブタインフルエンザA(H1N1)のヒト感染」についての報告がJournal of Infectious Diseases 2010; 201に発表された。パンデミックH1N1 2009株とは異なるブタ起源であるインフルエンザA(H1N1)ウイルスの再集合体が患者3例から分離され、この3名はカナダ・Saskatchewanの同じ大規模ブタ作業場で働いていた。ノイラミナーゼおよびヘマグルチニン遺伝子がヒトH1N1ウイルスから判明し、A/Brisbane/59/2007と密接な関連があった。
18	新型インフルエンザ(H1N1)	ABC Newsletter #38. 2009 Oct 23; 13-14.	欧州連合の血液規制委員会 (Blood Regulatory Committee)は、H1N1インフルエンザパンデミックが血液供給に不足をもたらすと報告があることから、血液供給を十分確保するために2つの規制を緩和する事を検討している。欧州各国の代表は、深刻なパンデミックにより10-15%の輸血用血液が不足となる事を懸念している。委員会はEBA (European Blood alliance)、欧州内のassociation of national suppliers and regional alliancesおよび各国規制機関(Competent Authority)に出席を依頼し、安定供給を維持するためにどの規制を緩和するか検討した。インフルエンザ様症状回復後の献血延期期間の短縮(14日から7日もしくは5日へ)およびヘモグロビン値の基準の緩和(女性: 12.5から12g/dLへ、男性: 13.5から13g/dLへ)を検討している。
19	新型インフルエンザ(H1N1)	IDWR Week 49 2009; 11(49) p.15	WHOは2つのオセルタミビル耐性H1N1ウイルス感染患者のクラスター報告を受けた。いずれも病院内における同じ病棟内で発生しており、免疫不全、あるいは高度の免疫抑制状態にある患者に感染がおき、耐性ウイルスのヒト-ヒト感染が疑われている。抗ウイルス薬投与中の薬剤耐性ウイルス発生は、季節性インフルエンザで明らかとなっているが、パンデミック(H1N1)2009においても観察された。現在、院内感染経路の特定、医療従事者や入院患者、院外への感染拡大について確認作業中であるが、これまでの結果は安心できるものである。
20	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 14	デンマークにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス(2009): 発生日 2010年1月4日、最初の確定日 2010年1月9日、報告日 2010年1月9日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス。2010年1月4日にRingsted JystrupおよびHolbaek TolloseでパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。各々、飼育数ブタ3,200頭、確定例はブタ720頭、死亡例0頭および飼育数ブタ3,400頭、確定例はブタ950頭、死亡例3頭であった。
21	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20100101.0014	中国AFCD (Agriculture, Fisheries and Department)は、2009年12月10日、地方牧場から集めたブタの鼻スワブ検体がパンデミックインフルエンザA H1N1に陽性であったことを確認した。1200頭のブタを飼育するこの牧場のブタ全頭にインフルエンザ様症状はなかった。AFCDは当該牧場のブタについて更に検査を始め、また、すべての地方ブタ牧場からサンプルを収集したが、これまでのところすべて陰性である。

22	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 September 18	英国におけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009)ウイルス:発生日 2009年9月1日、最初の確定日 2009年9月16日、報告日 2009年9月18日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2009年9月2日にNORTHERN IRELANDでアウトブレイクが発生し、飼育頭数はブタ5,000頭、確定例はブタ4500頭、死亡例5頭であった。
23	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 October 27	アイスランドにおけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009)ウイルス:発生日 2009年10月24日、最初の確定日 2009年10月27日、報告日 2009年10月27日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2009年10月24日にGULLBRINGUでアウトブレイクが発生し、飼育頭数はブタ4,500頭、確定例はブタ10頭、死亡例0頭であった。
24	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 26	インドネシアにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス:発生日 2009年8月27日、最初の確定日 2009年9月15日、報告日 2009年11月26日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年8月27日にKEPULAUAN RIAUでパンデミックA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ250,000頭、確定例は不明、死亡例0頭であった。
25	新型インフルエンザ(H1N1)	CCDR Weekly 2009; FluWatch (Week35)	カナダPHAC(Public Health Agency of Canada)によるパンデミック(H1N1)ウイルスの監視と疫学調査の週間報告である。2009年8月30-9月5日の週は、全体のインフルエンザ活動の傾向は先週と同様の活動性を示し、ILI診断の割合は一年のこの時期の予想よりわずかに高かった。パンデミック(H1N1)2009のピークは6月の最初の3週間であった。罹患数においてはパンデミック(H1N1)2009の勢いは低く、この週の入院数は11例および死亡2例が報告された。2009年9月5日現在、入院総数は1,445例、285例はICUに入院し、パンデミックが起こって以来死亡総数は74例となった。また、パンデミック(H1N1)2009は全州および準州に広がったが、これまで入院症例の約90%および死亡症例の85%以上は4州(AB, MB, ON, QC)から報告されている。2歳以下の子供、妊娠女性、疾患のある65歳以下の人および先住民は、入院する割合が高くまた重症化するリスクが大きい。
26	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 23	韓国におけるパンデミックインフルエンザH1N1:発生日 2009年12月14日、最初の確定日 2009年12月14日、報告日 2009年12月23日、原因 パンデミックインフルエンザH1N1ウイルス。15のアウトブレイクが2009年14, 16, 18日に発生し、総計で疑い例はブタ23,691頭、確定例はブタ241頭、死亡例は0頭であった。
27	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 27	セルビアにおけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009):発生日 2010年1月18日、最初の確定日 2010年1月25日、報告日 2010年1月25日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2010年1月18日にSRBIJAでパンデミックH1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ10,830頭、確定例はブタ20頭、死亡例0頭であった。
28	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 17	タイにおけるインフルエンザA/H1N1ウイルス:発生日 2009年12月4日、最初の確定日 2010年12月14日、報告日 2009年12月14日、原因 インフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年12月4日にSARABURIでインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ680頭、確定例はブタ34頭、死亡例0頭であった。
29	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 5	台湾におけるA/H1N1インフルエンザウイルス:発生日 2009年10月19日、最初の確定日 2009年11月2日、報告日 2009年11月5日、原因 A/H1N1インフルエンザウイルス。2009年10月19日にT'AI-TUNGでA/H1N1インフルエンザウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,346頭、確定例はブタ160頭、死亡例0頭であった。
30	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 17	中国におけるインフルエンザA/H1N1ウイルス:発生日 2009年10月28日、最初の確定日 2009年11月19日、報告日 2009年12月11日、原因 インフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年11月25日にBEIJINGでインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はイヌ52頭、確定例はイヌ2頭、死亡例0頭であった。
31	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 9	デンマークにおけるパンデミックインフルエンザA/ H1N1ウイルス:発生日 2010年1月4日、最初の確定日 2010年1月9日、報告日 2010年1月9日、原因 パンデミックインフルエンザA/ H1N1ウイルス。2010年1月4日にEast, RingstedでパンデミックインフルエンザA/ H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,200頭、確定例はブタ720頭、死亡例0頭であった。
32	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 10	ドイツにおけるインフルエンザウイルスA H1N1:発生日 2009年11月21日、最初の確定日 2009年12月3日、報告日 2009年12月10日、原因 インフルエンザウイルスA H1N1。2009年11月21日にRHEINLAND-PFALZでインフルエンザウイルスA H1N1のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ425頭、確定例はブタ2頭、死亡例2頭であった。
33	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 20	日本におけるパンデミックインフルエンザH1N1(2009):発生日 2010年1月12日、最初の確定日 2010年1月12日、報告日 2010年1月20日、原因 パンデミックインフルエンザH1N1(2009)。2010年1月12日にYAMAGATAでパンデミックインフルエンザH1N1(2009)のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ2,445頭、確定例はブタ164頭、死亡例0頭であった。
34	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 3	米国における2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルス:発生日 2009年10月22日、最初の確定日 2009年11月1日、報告日 2009年11月3日、原因 2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルス。2009年10月22日にINDIANAで2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,000頭、確定例は不明、死亡例0頭であった。

35	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 24	ロシアにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルス: 発生日 2009年11月10日、最初の確定日 2009年12月3日、報告日 2009年12月23日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルス。2009年11月10日にCHUVASHSKAYA RESPUBLIKAでパンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ10,625頭、確定例はブタ45頭、死亡例0頭であった。
36	新型インフルエンザ(H1N1)	Clinical Infectious Diseases 2010; 672-678	重症パンデミック2009インフルエンザA(H1N1)ウイルス感染とイムノグロブリンG2(IgG2)欠損との関連を調査するため、H1N1感染患者集団におけるIgGサブクラスのレベルを調べた。H1N1感染患者を、重症・中等度・健康妊婦に分類し、各群の血液サンプルを比較した。統計学的に有意な低アルブミン血症、貧血、総IgG・IgG1・IgG2レベル低下が重症H1N1感染患者に認められ、これらのレベル低下と重症H1N1感染と関連が示された。多変量解析後にも低アルブミン血症と平均IgG2レベルについて有意差が見られた。IgG2欠損患者を対象に平均90日間の追跡調査を実施したところ、低アルブミン血症はほとんどの患者で解消していたが、IgG2欠損は解消しなかった。健康妊婦では軽度のIgG1/IgG2低下が認められたが、H1N1感染妊婦ではIgG2レベルが有意に低かった。
37	新型インフルエンザ(H1N1)	Eurosurveillance 2010;15(9): pii=19498	2009-2010年のノルウェーにおいて、2009パンデミックインフルエンザA(H1N1)ウイルスのhaemagglutinin HA1に変異のあるD222Gが死亡および重篤症例に頻りに認められたが、中等度の症例では事実上認められなかった。この差異は統計的に有意であり、本結果は、この変異と臨床症状間における因果関係と一致している。本報告は、重症例の転帰と関係のあるパンデミックウイルスにおける変異の特定を行った最初の報告である。一方、非重篤症例においても、実際に変異ウイルスが非常に低い頻度で流行しているかを判断するために軽症の症例を対象とした調査が必要である。
38	新型インフルエンザ(H1N1)	Emerging Infectious Diseases 16(4); 722-723 April 2010	日本血液センターは献血後にインフルエンザAパンデミック(H1N1)2009感染の可能性のある血液製剤につき、NAT(nucleic acid amplification technology)を用いてウイルス遺伝子を検査した。献血後7日以内にインフルエンザの症状を示した96人の供血者から血漿96検体および赤血球67検体を検査した結果、パンデミック(H1N1)2009ウイルスはどの検体からも検出されなかった。パンデミック(H1N1)2009ウイルスにおけるウイルス血症が非常に低いためNATで検出されない、あるいはウイルス血症を同定するには確認期間が短いことが示唆される。
39	新型インフルエンザ(H1N1)	Atlanta health, diet and fitness news (2009 October 29)	米国においてタミフル耐性H1N1ウイルスがヒト-ヒト間で伝播した初めての症例が報告された。2009年6-7月、ノースカロライナ州でキャンプ中の65人にH1N1感染のため、600人には予防目的でタミフルが処方された。同じキャビン内の2人の女性は、タミフル服用後に症状が発現し、2ヶ所に変異のあるウイルスが検出され、薬剤耐性であった。このウイルスは、検査した他のヒトには検出されなかった。問題は、1人の女性からもう1人の健康なキャビンメイトにウイルスが伝播したことであり、予防目的で健常者がオセルタミビルを服用することは、耐性獲得のリスク増加に繋がるかもしれない。予防目的の場合、抗ウイルス薬の代わりにH1N1ワクチンが有用であると考えられる。
40	新型インフルエンザ(H1N1)	Norwegian Institute of Public Health (2009 November 20)	ノルウェーで新型インフルエンザ陽性であった患者3例に、インフルエンザA(H1N1)変異株が検出された。パンデミックインフルエンザのサーベイランスの一部として患者数人のウイルスを解析した結果であり、これまでもいくつかの変異株が検出されているが、注目した変異株は新型インフルエンザA(H1N1)感染による死亡2例から検出された。この2例はノルウェーで新型インフルエンザ由来で死亡した最初の2例であり、その後、死亡例からの変異株の検出はない。この変異は、気道のより深部に感染し、その結果重篤化を引き起こす可能性がある。ノルウェー人症例から確定された約70のウイルスを解析し、3例の患者からのみ変異株を検出した。この変異株は集団に流行はしておらず、自然発生した可能性があり、ワクチンや抗ウイルス薬の効果に及ぼす影響はない。
41	新型インフルエンザ(H1N1)	BBC News (2009 November 20)	英国では(2009年11月20日現在)、ブタインフルエンザのタミフル耐性株が入院患者の間で広がっている。University Hospital of Walesの重症患者を処置しているユニットで5例の患者が感染した。2例は回復し退院したが、1例は集中治療を受け、2例は病棟で治療中である。当局によると、他の患者への影響はなく、原因究明中である。院内感染はこれまでに3例あるが、タミフル耐性株のヒト-ヒト感染が初めて確認された症例である。
42	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091020.3600	パンデミックH1N1インフルエンザウイルスが米国内のブタで初めて確認されたとUSDA(U.S.of Agriculture Department)は発表し、また、食用ブタが感染しても屠殺はせず、ブタ肉製品からこのインフルエンザに罹患することはなく、食べても安全であると報告した。感染が確認されたブタはミネソタ州フェアに出品されており、このフェアに参加した4例の10代若者がH1N1ウイルス陽性と診断された。USDAは、現時点で収集した情報によると、この若者はフェアのブタに接触したことで罹患したのではないと報告した。
43	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091202.4111	米国Virginia州で養殖用七面鳥の群れにパンデミックH1N1が検出され、米国農務省(US Agriculture Department)は米国内における七面鳥では初症例であると報告した。カナダとチリでは報告がある。インフルエンザ様症状のあった作業員から七面鳥に感染した可能性が報告されている。
44	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091228.4372	米国では2か所のNorth Carolina農場におけるブタから採取した検体において、新型H1N12009インフルエンザウイルスが検出された。いずれの農場でも、ヒトからブタにウイルスが感染したと報告され、インフルエンザウイルスに感染後回復したブタ由来の豚肉を食べても安全である。ブタに新型H1N1インフルエンザが確認された州は他に3州あり、また、ネコ、フェレット、七面鳥、イヌおよびチータにおいてウイルスが検出されているが、すべてヒトからの感染である。

45	新型インフルエンザ(H1N1)	Eurosurveillance 2010;15(16): pii=19546	スコットランド西部におけるパンデミックインフルエンザA(H1N1)に感染した、コミュニティ患者および重症患者に対し、HA (haemagglutinin)遺伝子のD222G(222番目のアミノ酸がアスパラギン酸からグリシンへ変異している)について解析を行い、更に、重症患者のうち死亡例と回復例について検討した。その結果、D222Gの発現率は、死亡例では8.7%(2/23例)に対し、コミュニティ患者および回復例では0%(0/35例)であった。また、D222N(アスパラギン酸→アスパラギン)の発現率は、死亡例および回復例では6.2%(2/32)であったが、この変異の重要性は不明である。D222G変異を持つ死亡患者のうち1例は、D222(変異なし)およびD222Gが混在していたが、この同一患者から再び採取した他の2サンプルからは、D222Gのみ及びD222Gが検出され、当該患者は混在した変異を持つウイルスに罹患した事を再確認した。
46	新型インフルエンザ(H1N1)	WHO Pandemic (H1N1) 2009 - update 101	WHOによるパンデミック(H1N1)2009に関する週間報告であり、世界の各地域の感染状況について更新された。パンデミックインフルエンザH1N12009の確定症例が214カ国を超える国から報告され、この中には死亡18097例が含まれている。状況は前回から大きな変化はなく、パンデミックインフルエンザウイルス感染の最も活動している地域は地中海および東南アジアであり、南北半球の温帯地域では低く散発的である。中央アメリカではB型季節性インフルエンザ感染が増加しており、すべてのインフルエンザ分離株の85%に達している。インフルエンザB型はアジアおよびヨーロッパの一部で低いレベルでの検出が続いており、現在、中央アメリカで報告がされている。
47	新型インフルエンザ(H1N1)	CDC FluView 2009-2010 Influenza Season Week 19 ending May 21, 2010	米国CDCは、Week 19(2010年5月9-15日)における国内インフルエンザ活動が減少した事を報告した。検査の後、インフルエンザ部門に報告された検体14(0.9%)がインフルエンザ陽性であり、CDCに報告されたインフルエンザAウイルスのすべてが2009インフルエンザA(H1N1)ウイルスであった。また、肺炎およびインフルエンザに起因する死亡の割合はepidemic thresholdを下回り、インフルエンザに関連した小児の死亡例は報告がなかった。インフルエンザ様症状で来院した患者の割合は0.8%であり、全国基準の2.3%を下回り、調査対象である10の全地域についても地域の基準を下回った報告であった。
48	鳥インフルエンザ	Virus Genes. 2009 Aug;39(1):76-80.	トリインフルエンザH5N1ウイルスの感染者における組織分布および肺以外の臓器での複製能を調査するため、感染患者の剖検を実施した。ウイルス量は脾臓に比べて肺で最も多く、心臓・肝臓・腎臓・大小腸または脳ではウイルスは検出されなかった。また、ウイルス量は右肺に比べて左肺より多く検出され、左肺の病理組織により重篤な損傷が認められた結果と一致し、また、左肺組織には+/-鎖双方のウイルスRNAが存在した。一方、低ウイルス量であった脾臓には+鎖ウイルスRNAは認められず、循環血液などによって運ばれた可能性が示唆される。
49	鳥インフルエンザ	PLoS Pathogens 5(12); e1000709; 2009 December	2003年以来、H5N1トリインフルエンザウイルスのヒト感染例は400例を超え、60%以上の死亡率である。ほ乳類のモデルとしてモルモットを用い、6種類のH5N1トリインフルエンザウイルスの感染実験を行った結果、2種類のウイルス(DKGX/35およびBHGQH/05)は接種動物から未接種動物へ伝播した。変異実験からPB2蛋白の701番目に位置するアスパラギンがモルモットにおけるDKGX/35の感染に必須であり、HA(hemagglutinin)蛋白におけるアミノ酸変化(158-160番目の糖化の欠損)はシアル化グリカンへのHA結合を招き、モルモットにおけるH5N1ウイルス感染にとって必須条件であった。PB2およびHAにおけるアミノ酸の変化は、H5N1株がパンデミックを起こす可能性を評価する重要な分子マーカーとなるかもしれない。
50	日本脳炎	日本ワクチン学会第13回学術集会(2009 September 26-27) 1A-C-6	国内におけるヒトおよびブタのJEV(日本脳炎ウイルス)に対する中和抗体(NT価)および赤血球凝集抑制抗体価(HI価)が測定され、日本脳炎抗体保有状況が報告された。本報告は、2008年度感染症流行予測調査(11都道府県の約3,200人および35都道府県のブタ約5,000頭を対象)に基づいて実施された結果である。ヒトにおける抗体保有率(NT価1:10以上)は1-5歳:20%未満、8歳:70%、9-20代前半:80%以上、20代後半以降から激減し、40-50代:30%未満であった。また、3-4歳(標準的接種年齢)では2004年度には62.0%であったが、2006年度以降激減し、感受性者の蓄積が認められた。今後、定期予防接種対象年齢者および2005年5月に発令された「勧奨差し控え」期間に接種を受けなかった者などにつき、抗体保有率の向上が望まれる。
51	日本脳炎	日本ウイルス学会第57回学術集会(2009 October 25-27) 2P145	富山県内の蚊(21ヶ所で捕集した48プール)およびブタ血清(4ヶ所で採取された9検体)における日本脳炎ウイルス(JEV)分離および分離株の遺伝学的解析が報告された。JEVの検出時期と蚊の発生消長を比較した結果、豚舎では、蚊の発生後JEV陽性率が上昇し、牛舎では、豚舎よりJEV陽性率は低く、時期は一致する傾向にあった。アカイエカの発生の少なかった2006年にはJEVは分離されなかった。また、EおよびprM領域の遺伝子解析の結果、いずれの分離株もGenotype1型であった。
52	狂犬病	ProMED-mail 20100119.0212	米国Prince George's Countyの小・中学生教育用農場で6週齢の仔牛1頭が狂犬病陽性を示した。この感染した仔牛に接触したヒトは、電話をしてくるよう当局は依頼している。
53	狂犬病	CDC/MMWR 2010; 59(7); 185-190: 2010 February 26	2009年米国テキサス州で、17歳の少女が狂犬病の不稔感染と診断された初の症例報告であり、病気の診断に複数回入院したが、集中治療を受けることなく回復した。人畜感染症である狂犬病は、発病後に文書化された証拠のある回復例は世界で6例であり、5例は感染前に予防接種を受けていた。当該患者は、頭痛・候輝所恐怖症などのため入院し、症状の回復により退院したが、頭痛の再発により他院を受診し、感染性脳炎が疑われ、入院した。頭痛発症の2ヶ月前にコウモリと接触していたことから、CDC(Centers for Disease Control and Prevention)にて検査を行った結果、血清および脳脊髄液に狂犬病ウイルス抗体陽性が認められたため、狂犬病ワクチンおよびヒト狂犬病免疫グロブリンが投与され、回復・退院した。

54	水疱性口内炎ウイルス	OIE 2010 May 27	米国における水疱性口内炎ウイルス: 発生日 2010年5月17日、最初の確定日 2010年5月26日、報告日 2010年5月27日、原因 水疱性口内炎ウイルス。2010年5月17日にARIZONAで水疱性口内炎ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数は乳牛5頭・ウマ科5頭、確定例はウマ科3頭であった。
55	チクングニヤウイルス感染	CDC/Traveler's Health 2010 April 7	2010年4月7日現在のアジアおよびインド洋におけるチクングニヤ熱のアウトブレイクについてCDCが報告した。当該地域における最近のチクングニヤ活動の高い地域は、インドネシア、タイおよびマレーシアであり、各国のアウトブレイク状況が示された。医者へのアドバイスとして、チクングニヤはマalariaやデングと発熱・悪寒・全身筋肉痛などの症状が似ているが、チクングニヤにおいては、急性期後に関節痛や関節炎が長引き、リウマチの検査が必要かと思われることがある。また、当該疾病が報告されている地域への渡航者に向け、露出している肌への虫除けの使用など、アドバイスも掲載されている。
56	黄熱	CDC/MMWR 2010; 59(5); 130-132 (February 12)	2009年4月、ブラジルにおいて母親が分娩後に黄熱ワクチンを接種し、黄熱ワクチンウイルスが母乳を介して乳児へ伝播したとの報告がなされた。乳児はほぼ母乳のみで育ち、生後23日に抗痙攣薬に治療を要する発作で入院し、髄膜脳炎の治療のため抗菌・ウイルス剤が投与された。乳児のCSF(脳脊髄液)からは17DD黄熱ワクチンウイルスが検出され、血清およびCSFに黄熱特異的なIgM抗体も検出された。調査の結果、乳児は母乳を介した黄熱ワクチンウイルス感染と特定され、黄熱ウイルスの曝露が避けられないもしくは延期できない場合を除き、授乳中の女性への黄熱ワクチン接種は行うべきではない。
57	デング熱	AABB Annual Meeting and TXPO; 2009 Oct. 24-27; New Orleans (Transfusion 2009; 49 suppl. S66-030G)	プエルトリコ(PR)では2007年に2005年のアウトブレイクより更に大きなデング熱アウトブレイクが起き、この間の供血者におけるデング熱ウイルス血症の割合について調査が行われた。調査用に保存された供血サンプルは米国およびPRで輸血されたユニットであり、TMA (transcription mediated amplification assay)で初回陽性(Initially reactive:IR)であったサンプルは再検査が行われ、再度陽性(repeat reactive:RR)を示した場合には追加の検査が行われ確定された。検査が実施された15,350試料のうちIRは28、RRは25試料であり、陽性の割合は1:614であった。陽性血液のうち12例(1:533)がPRから米国に輸出され、13例(1:689)がPRに残った。RRサンプル中約半数はIgM陰性で高力価ウイルス血症を示し、細胞培養検査において感染性が認められた。デング熱が流行している間は供血者のスクリーニングの措置が検討されるべきである。
58	デング熱	CDC Traveler's Health (2010 April 19)	米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)による海外渡航者向けアウトブレイク情報が更新され、熱帯および亜熱帯地域でのデング熱について情報提供された。2009年初頭以降、デング熱症例数の増加が世界の数地域から報告されており、アフリカ・南太平洋・中央/南アメリカ、カリブ海、及び中東におけるデング熱の状況が報告されている。旅行者へのアドバイスとして、蚊にさされないように防虫剤の使用を薦めており、幼児・新生児への対応および服装について等アドバイスしている。また、症状は発熱・激しい頭痛・目の奥/関節/筋肉痛・紅斑・吐気/嘔吐・出血症状などであり、予防のためのワクチンや治療のための特別な治療薬はないため、解熱などの処置が行われ、出血の可能性があるためアスピリンや非ステロイド性抗炎症薬の使用をさけること。また、早期発見・早期治療が死亡のリスクを下げることに繋がる。
59	灰白髄炎	ProMED-mail 20091031.3768[2]	パキスタンの不安定なスワット地域で過去4か月にポリオ患者13人が確認されたが、その主な理由は、予防接種する医者が1年以上も子供達にアクセスできなかったためである。政府軍とタリバン武装勢力の強烈的な戦いは2009年5月から始まり、軍事作戦は7月に終わったが、武装勢力のためポリオ撲滅チームは近づくことができなかった。パキスタンでは、2009年(10月まで)に62ポリオ症例が確認され、うち35例は北西部境界地区およびタリバン勢力地域で発生した。
60	口蹄疫	OIE 2010 March 1	中国における口蹄疫: 発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年3月1日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年2月22日にGUANGDONGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ8,382頭、確定例はブタ1,474頭、死亡例0頭、屠殺8,382頭であった。
61	口蹄疫	ProMED-mail 20100301.0672	2010年2月、ベトナムSon La省の二つの地区で口蹄疫が広がっており、水牛およびウシ235頭、ブタ180頭が感染した。感染地域では感染阻止および撲滅の措置を講じている。
62	パルボウイルス	Blood 114(17); 3677-3683; 2009 October 22	成分輸血によるパルボウイルスB19感染を評価するために、供血者と受血者の関係が既知である保存血液検体およびB19V DNA定量可能なPCRを用いてB19V感受性(抗B19V IgG陰性)である受血者のB19V感染について調査した。105名の供血者から112のB19V DNA陽性の成分輸血を得て、輸血前のB19V IgG陽性率が78%である手術患者に対する輸血を評価した。B19V DNAが $10^6$ IU/mL以下である成分輸血を受けた受血者24名には感染が認められず、B19V DNAが $10^{10}$ IU/mL以上である成分輸血を受けた輸血前の抗体陽性である受血者1名に既往反応が認められた。B19V DNAが $10^6$ IU/mL以下である成分輸血からは感染は起こらない、もしくは、まれであることが示唆され、献血の定常的なスクリーニングにB19V DNAのNAT検査は不要であることを支持している。
63	パルボウイルス	Emerging Infectious Diseases 16(3):561-564 March 2010	PARV4(parvovirus 4)は2005年にB型肝炎陽性のIDU(injection drug user)から検出され、また、古い血漿試料から調製されたヒト凝固因子濃縮製剤にも頻繁に検出された。健康ブタの血漿試料および血友病患者に使用されたブタ血漿由来第8因子濃縮製剤(1994-2001年調製)からPARV4様ウイルスをスクリーニングした。その結果、血漿試料におけるPARV4様ウイルスの保有率は比較的低かったが、ウイルスはブタ血漿由来第8因子の製造中に濃縮されることで検出されたことが報告されている。

64	ウイルス感染	Emerging Infectious Disease 15(11):1830-1832 November 2009	MAYV (Mayaro virus)はアルファウイルス(Alphavirus)属トガウイルス(Togavirus)科に属し、genotypeDおよびLの2系統が確認されている。2008年2月、ブラジル北部サンタバーバラにある村でMAYVのアウトブレイクが起こり、患者は発疹、発熱および重篤な関節痛が最長7日間続いた。患者血清検体のIgMをELISAで検査した結果、36検体からMAYVに対するIgMが検出された。MAYV分離株3株がgenotypeDと確認され、また、村で捕獲した蚊にはMAYVの主要な媒介蚊であるHaemagogus janthinomysが含まれていた。
65	ウイルス感染 (ヘンドラウイルス)	ProMED-mail 20100203.0366	ブタが致死性ヘンドラ(Hendra)ウイルスに感受性があり、ブタを介してヒトに伝播する可能性があることをカナダの研究者が報告した。ヘンドラウイルスはオーストラリアでのみ発生し、野生の果実食コウモリによって媒介され、ウマは感染したコウモリの排泄物から感染する。ウマからヒトへの感染は7例あり、うち4例は死亡し、直近の死亡2例はウマの獣医師であった。カナダにおける研究では、ヘンドラウイルスを接種したブタ(2種類)は発熱・衰弱を呈し、接種後2-5日に全頭からウイルスが検出された。また、Queenslandのブタ100頭の群れの血清を検査した結果においては、500検体中にヘンドラウイルスに対する抗体は検出されなかった。
66	ウイルス感染	Transfusion Medicine 2009; 19: 213-217	アルブミン溶液、PTC(プロトロンビン複合体)およびFIX(血液凝固第IX因子)からB19V(パルボウイルスB19)およびTTV(torque teno virus)を除去するナノフィルトレーションの可能性を評価した。実験の規模を小さくし、各製剤に各々のウイルスDNA陽性血清を添加し、35nmに続いて15nmのナノフィルトレーションを行った。ウイルス量の測定はリアルタイムPCRによって行われ、15nmナノフィルトレーションは3製剤からB19Vについて4.0log以上の除去能を示し、TTVについては、15および35nmナノフィルトレーションによりアルブミン溶液およびFIXから各々3.0log以上の除去能を示した。また、これらの処理後、ウイルスDNAは測定されなかったが、一方、15nmナノフィルトレーション後のPTCではTTVが検出された。
67	ウイルス感染 (ヘンドラウイルス)	Vet. Res. (2010) 41:33 DOI:10.1051/vetres/2010005	ブタに人畜共通感染ウイルスであるヘンドラウイルス(HeV)を接種する実験を行った結果、ブタが宿主となることが示された。実験には2種類のブタが用いられ、HeV接種された全頭に発熱・抑制が発現し、接種後5日には呼吸器徴候や7日には神経学的徴候を示すブタもいた。接種後2-5日では全頭の間・鼻・直腸より、接種後3-5日では眼よりHeV M遺伝子がReal-timeRT-PCRにより検出された。ウイルスRNAは、感染初期に主に呼吸器およびリンパ系から組織へと分布し、ウイルス分離によりウイルス感染が確認された。また、病的変化およびウイルス抗体による免疫組織学的染色は、ウイルスの組織分布と一致した。ブタはHeV感染に感受性があり、ヒトへの感染を仲介する宿主となる可能性が示唆される。
68	BSE	<ul style="list-style-type: none"> <li>CFIA (March 31 2010)</li> <li>Meat Trade News Daily (March 16 2010)</li> <li>Reuters (March 10 2010)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カナダCFIA(Canadian Food Inspection Agency)は2010年にカナダで確認されたBSE(Bovine spongiform encephalopathy)症例についてのリストを公開しており、2010年3月31日現在、2月25日にアルバータ州の肉食用雌牛(71ヵ月)がBSE症例と確認された。</li> <li>カナダで17例目となったBSEの発見は、利害関係のある業界には2月25日に連絡が成されたが、メディアや一般に向けての公表はなかった。このBSEの新規症例公表に関する取り決めは2009年8月に決定され、一般にはCFIAのホームページ上で情報提供される。新規BSEは、カナダで最もBSE発生の多いアルバータ州内で、6歳のアンガス黒牛についての監視プログラムで検出された。カナダでは2009年には5月に1例、2008年に4例、2007年3例、2006年には5例のBSEが発生している。</li> <li>カナダで検出された新しい17例目のBSE感染牛は2004年2月の出生であり、(negligible statusへの更新は、BSE例の最新出生年から11年以内は申請できないため)OIE(World Organization for Animal Health)によるrisk statusの更新は2016年へと延期されるであろう。BSE感染牛は屠殺処分され、牛肉取引には影響はなかった。</li> </ul>
69	クロイツフェルト・ヤコブ病	Neuropathology 29(5); 625-631; 2009 October	日本CJDサーベイランス委員会(CJD Surveillance Committee)により、最近の9年間で登録された患者に行われた医療(外科処置、脳神経外科処置、眼科手術および輸血)が調査された。孤発性CJD(sporadic CJD)753名と対照被験者210名から成る症例対照研究において、プリオン病がsCJD発症前に調査対象の医療を介して伝播したことを示すエビデンスを見出せなかった。これまでに報告された症例対照研究のレビューにおいて、輸血がCJDの有意なリスク因子であることが示された事はなく、本研究も同様の結果であった。本研究において、sCJD患者の4.5%はsCJD発症後に手術(0.8%が脳神経外科処置および1.9%が眼科手術)を受けており、sCJD発症後ですら手術(脳神経外科処置および眼科手術を含む)を受けた患者がいる事実は、医療処置を介したプリオン伝播の可能性を除外できないことを示唆している。
70	クロイツフェルト・ヤコブ病	Neuropathology 2010; 30(2): 159-164	PRNP(prion protein gene)のコードン180番目に点変異のあるCJD(Creutzfeldt-Jakob disease)の死亡例の報告である。77歳女性には不安定な歩行、続いて認知症・手足/体幹の運動失調となり、発病から26ヵ月後に肺炎で亡くなった。剖検の結果、大脳皮質には顕著な海綿状態・神経細胞消失・星状細胞のグリオーシスを認め、多くの老人斑(stageC)および神経原線維変化(stageIV)を認めた。PrP(prion protein)の免疫染色の結果、大脳皮質、特に海馬に粒状および斑点状のPrPが検出され、殆どの斑点状PrP沈着はアミロイドβプラークと一緒に存在し、本症例では、比較的強いPrP沈着とアルツハイマー型病変の同時発現が顕著であった。アミロイドβプラークがPrP沈着を促進する要因として作用しているかもしれない。



71	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20100107.0076 [1] (UK: National CJD Surveillance Unit - monthly statistics as of 5 Jan 2010)	英国CJDサーベイランスユニットの月間統計によると、2010年1月5日現在、2009年の確定もしくは疑いvCJD患者の総数は170名(死亡:166名、生存:4名)である。2009年に2名のvCJD新規症例が登録されたが、英国におけるvCJDアウトブレイクは減少しているとする見解と一致している。
72	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Haemophilia 2010; 1-9	英国において、vCJD(variant Creutzfeldt-Jakob disease)のリスクが高いと考えられるが、神経症状を呈しない血友病患者17例(剖検11例および生検7例)につき、疾病と関連のあるPrPres(protease-resistant prion protein)の検出を検討した。1剖検の脾臓組織はウエスタンブロット解析の結果、PrPres強陽性を示した。組織の由来元である73歳男性患者は、神経症状を発現しなかったが、プリオン蛋白のコンドン129番目がヘテロ型(メチオニン/バリン)であり、vCJD感染ドナーからの供血を含む(もしくは不明な)第Ⅷ因子製剤を投与されていた。他にも赤血球製剤投与や外科手術、内視鏡を経験しており、諸要因を介する関連リスクのうち、英国血漿製剤投与からの感染が最も示唆される。
73	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	UK Department of Health, SaBTO (Summary of the 8th Meeting); 2009 October 27	英国SaBTO(Advisory Committee on the Safety of Blood, Tissue and Organs)の第8回会議(2009年10月27日開催)の要旨が示されている。プリオンフィルターについて、プリオンフィルター処理赤血球の安全性を評価する臨床試験(PRISM trial)および同製剤の有効性評価からの新しいデータがvCJDワーキンググループから報告された。臨床試験の初期結果は有望であったが、この試験には完了までに時間がかかる事が分かり、動物を使用した内因性因子による有効性研究からデータが得られるのは2014年になる。これらの情報と分析から、委員会は1. 本フィルターが感染を低減する十分な証拠が現在はあるとし、2. PRISM臨床試験の完了を条件とし、フィルター処理赤血球は1996年1月1日以降に生まれたヒトへの提供を推奨する。
74	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	AABB Weekly Report 16 (10) 2010 March 12	NIH (National Institute of Health)の研究者はマウスにおいてプリオン関連の障害の特徴であるスポンジ様の脳損傷を引き起こさないプリオン病の新しい形状を報告した。この新しいプリオン病は脳アミロイド血管障害によるヒトの脳動脈を破壊するアルツハイマー病と似ている。本研究は、プリオン病の徴候が多数発現したが、プリオン病を代表するニューロン内外のスポンジ様の穴は観察されず、マウス脳には動脈、静脈および毛細血管の損傷により血管外で捕捉されたプリオン蛋白プラークが蓄積されていた。
75	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Transfusion 50(5); 980-988	プリオン除去フィルターを用いた赤血球からのプリオン感染性の評価に、新しい高感度細胞培養を用いた研究報告である。1-2日培養のABO適合性ヒト赤血球にスクレイパー感染マウスの脳ホモジネートが添加され、標準の白血球除去フィルターもしくはプリオン除去フィルターにより濾過を行った。フィルター除去前後におけるプリオン感染性のレベルが、細胞培養を用いたSSCA (standard scrapie cell assay)によって測定された。その結果、全ての22層プリオン除去フィルターはSSCAの検出限界を下回り(≧ $2.0 \log^{10} LD_{50}$ )、一方、10層の改良型では濾過後に感染性が残存していた。本in vitro感染性アッセイは、輸血を介した異型クロイツフェルト・ヤコブ病感染リスクを減じるための装置のスクリーニングや発見に貢献するであろう。
76	レンサ球菌感染	PLoS ONE 2010; 5 (1); e8795	GBS (Group B Streptococcus)の異種間感染を調査するために、68家族およびその家畜を対象に前向きコホート横断研究を行った結果、ヒトで12.3%(154例中19例)、動物で1.7%(115例中ウシ・ヒツジ各1例)のGBSが検出された。MLST (multilocus sequence typing)を用い、8種類の遺伝子型も同定された。また、GBS定着の認められた夫婦は、家畜である仔牛にもGBS定着が検出され、GBSの型は夫婦の型と一致した。質問書のデータを多変量解析したところ、畜牛との接触はGBS定着を予測する結果となった。GBSは人畜共通感染の可能性があり、公衆衛生措置を必要とする結果が提示された。
77	コリネバクテリウム	Emerging Infectious Disease 15; 1314-1315 August 2009	ブタと接触のあったヒトにおける重篤なC.ulcerans(Corynebacterium ulcerans)によるジフテリア類似症状の報告である。2007年12月、ドイツで56歳女性農業従事者が1週間に亘る咽頭痛および進行性嚥下障害のため入院し、広範囲の口腔咽頭の偽膜によりジフテリアが疑われ、その白色偽膜の咽頭スワブからは毒素産生性C.ulceransが培養された。発生源を特定するため、患者家族および家畜動物の調査が行われ、家族全員とイヌはC.ulcerans陰性であったが、ブタ19匹中1匹にC.ulcerans毒素産生株の保菌が認められた。ヒトおよびブタ株間のrpoBおよびtox配列は100%相同性を示し、また、リボタイピング解析の結果、ヒトおよびネコに認められるU1リボタイププロファイルと類似していることが示唆された。
78	炭疽	GMA News.TV 2010 February 28	フィリピンのCagayanで死亡した2例は感染した動物の肉を摂取し、炭疽菌による死亡と推察されており、また、150人以上が病院に運ばれたとの報告もある。この地域では、昨年、同じ種類の細菌が同じ町の住人数名に感染した経緯があり、死亡の原因究明のための診断を行っている。細菌は土壌に10年もしくはそれ以上残存しているため、死亡した動物を摂取しないよう勧告しており、また、患者および住民には炭疽病の治療薬が投与された。感染が疑われる地域での家畜動物は、直ちに処分するよう警告がされた。
79	炭疽	ProMED-mail 20100520.1677	米国サウスダコタ州南部中央のSioux郡で1例の炭疽例が発生し、ノースダコタ州北東部・南東部・南部中央での報告が殆どであったのに対し、今回、初めて確定例が検出された。ノースダコタ大学は家畜生産者に対し、動物への炭疽ワクチン接種について、特に発生歴のある地域に対しアドバイスを行っている。ワクチンによる免疫獲得には約1週間かかり、約6か月で弱まるため、接種計画を確認すること、また、前回発生例の6マイル以内では接種をすること等の勧告が記載されている。

80	結核	CHEST 136(2); 2009 August	イランにおいて、MDR(multidrug-resistant)-TB(tuberculosis)患者におけるTDR(totally drug-resistant)もしくはXDR(extensively drug-resistant)TBの新しい型が検出された。分離されたMycobacterium tuberculosis株の1次および2次治療薬感受性が試され、spoligotyping法およびVNTR(variable numbers of tandem repeats)により、XDRもしくはTDRであるか同定された。146のMDR-TB株のうち、8株(5.4%)がXDRであり、15株(10.3%)がTDRであった。MDR-TB患者が受けた平均的な治療期間と薬剤は、5剤の15ヵ月投与による2コースであり、全研究症例のin vitroにおける薬剤耐性で共通するものは、INH(isoniazid)およびRF(rifampicin)であった。XDRもしくはTDR株は移民(アフガニスタン人・アゼルバイジャン人・イラク人)およびイラン人のMDR-TB症例の両者から集められ、塗抹および培養は2次治療薬を培地中に18ヵ月間添加しても陽性であった。spoligotyping法により明らかとなったM tuberculosisのスーパーファミリー(Haarlem・Beijing・EAI・CAS)は異なるVNTRを示し、MDR-TB症例間で最近おきた伝播ではないことが明らかとなった。異なる国のMDR-TB患者からTDR株が分離されたことから、アジア諸国での拡散の可能性が懸念される。
81	結核	ProMED-mail 20100107.0065	米国Yankton Countyの乳牛群で1頭の3歳牛にウシ結核陽性が確認された。州の獣医師は、乳牛群に対して追加検査を通して検疫が行われており、現在、確定症例は1頭のみであるが、必要な措置を講じていると説明した。
82	結核	ProMED-mail 20100325.0948	米国Emmet Countyのウシ1頭が、定期ウシ結核サーベイランス検査の結果、ウシ結核陽性を示した。この農場から半径10マイル以内のすべての乳牛群は、6ヵ月以内に検査が行われる予定であり、全例が陰性であれば、元のスケジュールに戻される。他に、野生オジロジカではウシ結核は継続的に存在しており、鼻と鼻の接触で感染することから、乳牛の餌が感染したシカの唾液などから汚染される事で、より感染が起こりやすくなる。
83	結核	ProMED-mail 20100409.1144	米国Nebraska州北部で1頭の新しいウシ結核症例が検出され、7つの乳牛群が検疫下に置かれている。ウシ結核が感染した乳牛からヒトへ感染することはまれであるが、牛肉は適切に処理され、ミルクは殺菌されている限り、食べ物を介したウシ結核の拡散の危険はほとんどない。2009年6月に2例がRock Countyで検出され、Nebraska当局は22,000頭の乳牛を検査したが、今回の調査はこの時よりは小さいと予想している。
84	結核	ProMED-mail 20100528.1768	米国ケンタッキー州で2頭の乳牛にウシ結核陽性が確認され、3頭目は検査中であると報告された。最初のウシがペンシルベニアで屠殺される際に陽性が確認され、他の疑い2例中1頭が検査の結果陽性であった。この3頭は食肉として流通しておらず、また、ウシ結核がヒトに感染するのは稀である。
85	サルモネラ	Antimicrobial Agents and Chemotherapy; 2010; 54(1): 551-553	アイルランドの家畜における、広域セファロスポリン耐性であるSalmonella enterica serovar Kentucky (S.Kentucky)の出現についての報告である。2000年1月-2008年9月にアイルランド国内でヒトおよび動物から検出されたS.Kentucky925株は、すべてセファロスポリン感受性であったが、2008年10月-2009年3月では115株のうち7株がセフトキサシムおよびセフトジジムに耐性であり、セファロスポリン耐性株はニワトリおよび鶏舎粉塵から分離された。分離株のβラクタマーゼ遺伝子(bla)を解析した結果、bla <sub>CMY-2</sub> 遺伝子は3株およびbla <sub>SHV-12</sub> 遺伝子は4株に検出され、いずれも家畜由来S.Kentuckyからは初めてである。また、分離株につき、PFGE(Pulsed-field gel electrophoresis)、Class 1 integronなどの結果が示された。アイルランドでは、家畜生産にセファロスポリンの使用は承認されていないが、アモキシシリンの使用がβラクタマーゼを産生し維持する選択圧となっている点に着目が必要である。
86	コレラ	WHO 31(84); 309-324; 2009 July 31	2008年の世界各国のコレラサーベイランスの要旨がWHOから報告された。2008年にWHOに報告がなされたコレラの症例数および報告国は2007年より増加し、症例数については7.6%および報告死者数は27.5%増加し、2008年のCFR(case-fatality rate)は2.7%であった。死者数の98%はアフリカ大陸からの報告であり、22カ国ではCRFは1-4.9%、5カ国では5.5-14.3%であった。WHOは下痢性疾患の62アウトブレイクを検証した結果、34カ国における55(89%)はコレラアウトブレイクと確認され、45(82%)はアフリカ、10(18%)はアジアであった。また、感染のパターンおよびアウトブレイクについて、アフリカ・アメリカ・アジア・ヨーロッパ毎に概説されており、ワクチンについても更新情報が報告されている。
87	ブルセラ症	OIE 2009 September 21	スイスにおけるブルセラ症:発生日 2009年9月9日、最初の確定日 2009年9月16日、報告日 2009年9月18日、原因 ブタ流産菌(Brucella suis)。2009年9月9日にGENEVEでブルセラ症のアウトブレイクが発生した。飼育頭数ブタ52頭、確定例ブタ39頭、死亡例1頭、屠殺例38頭であった。
88	ブルセラ症	OIE 2010 February 9	ドイツにおけるブルセラ症:発生日 2009年12月2日、最初の確定日 2009年12月18日、報告日 2010年2月9日、原因 ブタ流産菌(Brucella suis)。2009年12月2日にBRANDENBURGでブルセラ症のアウトブレイクが発生した。飼育頭数ブタ38頭、確定例ブタ5頭、死亡例0頭、屠殺例5頭であった。
89	ブルセラ症	ProMED-mail 20091215.4249	米国Idaho群でブルセラ症陽性の2頭目の動物(乳牛)が確認され、この群内のすべての動物が検査され、ほとんどの結果が出ている。前週、ブルセラ症の疑いのあった1頭目(ワクチン接種されていた15歳ウシ)は、更なる検査の結果、未感染であった。感染源は不明であるが、接触のあったヘラジカもしくはバイソンによると考えられている。乳牛の移動により、ブルセラ症が州を越えて蔓延する事が懸念されており、ブルセラ症フリーのCalifornia州は現状を保ちたいとしている。

90	ブルセラ症	ProMED-mail 20100401.1048	米国northwestern Wyomingのヘラジカ群でブルセラ症が増加しており、最近の乳牛のブルセラ症例はヘラジカから広がったと考えられている。ブルセラ症の増加の仮説としては、ヘラジカの密度が高くなったために、ヘラジカ間のブルセラ症感染頻度が高くなった、もしくは、診断検査が、発病率が高くなっている他の病気との交差反応を起こしているという可能性が考えられた。
91	ボツリヌス中毒	ProMED-mail 20100404.1084	米国Wisconsin州Rusk Countyで、ある一家のウマ5頭が死亡し、また近くの農家では乳牛が死亡していることについて、獣医師はボツリヌスによる疾病であると報告した。ボツリヌス毒素が土壌から検出されており、ウマの飼料である馬草に孢子が生えたと予測されている。ウマがボツリヌスに罹った場所を特定するために、農場由来の馬草が検査されている。
92	クラミジア	Infection, Genetics and Evolution 9; 1240-1247; 2009	フランスにおいて、家禽屠殺場の従業員3例に非定型肺炎がおき、10の養鶏場で疫学調査が行われた。25調査群中14群にクラミジア関連因子が検出され、オウム病クラミジア( <i>Chlamydophila psittaci</i> )が検出されたのは陽性群中1群のみであり、これまでに分類されていない新規クラミジドフィラ属の存在が明らかとなった。更に6陽性群からクラミジア菌を分離した結果、すべてのサンプルにおいて16s rRNA遺伝子配列の相同性はほぼ一致し、また、現在認められているクラミドフィラ属の株とは異なるが、同属であることが示された。一方、ompA遺伝子の配列は分離菌間で大きく異なった。各農場はこの新しいクラミジアの異なる株によって感染されたことが示された。
93	細菌感染	Transfusion 49; 2152-2157; 2009 October	日本において初流血除去導入前および導入後の血小板濃厚液(PC)の細菌汚染頻度を調査した。日本赤十字社が供給する、初流血除去導入前および導入後の有効期限切れPCを用い、保存から4日以上後に血小板検体をサンプリングし、好気性および嫌気性ボトル双方に10mL量を接種した。その結果、細菌汚染は初流血除去導入前後で0.17%(36/21,786)から0.05%(11/21,783)に減少し(減少率71%)、このうちacne菌を除いた臨床的に重要な細菌の汚染件数は4件(0.018%)であった。本結果より、初流血除去の効果は細菌汚染頻度において顕著であった。また、細菌汚染頻度は西欧諸国と同等であり、培養スクリーニング検査は非実施であるにも関わらず、日本ではPC輸血後の敗血症反応の発現頻度が低いのは、日本でのPCの保存期間が72時間と短い事が理由として考えられ、この重要性を示唆する結果であった。
94	細菌感染	FDA CBER Transfusion/Donation Fatalities Annual Summary 2009	2009年度(2008年10月1日~2009年9月30日)にFDAが報告を受けた供血後および受血後の死亡例の年報の概要が公表され、全80死亡例のうち、74例が受血者、6例が供血者に関する報告であった。前者につき、a)44例は輸血に関連した死亡 b)輸血を死因から除くことが出来ない死亡 c)8例は輸血との因果関係がない死亡、と結論が成され、輸血に関連した死亡の第一の原因はTRALI (Transfusion Related Acute Lung Injury)で13例(30%)あり、過去5年間では減少を続けている。2009年度ではHTR(Hemolytic Transfusion Reaction)およびTACO(Transfusion Associated Circulatory Overload)が第二の原因であるが、HTRについては2008年度より減少を示した。なお、ABO不適合によるHTR死亡4例は人為的ミスによるものであった。また、細菌感染による死亡5例中2例は黄色ブドウ球菌(過去5年間の累積では1位のバベシアに次いで2位)が原因であった。2008年度に5例報告のあった赤血球に関連した細菌感染の報告はなかったが、この5例はすべてバベシア感染であった。apheresis血小板に関連した感染は微増を示したが、2001年度以降減少傾向にある。
95	真菌感染	ProMED-mail 20100426.1341	空中浮遊真菌であるCryptococcus gattiiにつき、米国における新しい遺伝子型の発生および病原性について研究が発表された。この新しい型はオレゴン州で死者を出し、カリフォルニアや近隣州へ移動する態勢にある。米国・太平洋北西部での最近のc.gattii症例(21例)の死亡率は25%であり、一方、カナダ・British Columbiaでの218例中19名の死亡(8.7%)である。高病原性である新規c.gattiiは弱毒株の遺伝子組換えが起きた可能性があり、研究者らは、新規遺伝子型VGIIcがオレゴン州におけるc.gattii症例の主な原因である事を見いだした。このVGIIc型の起源は分離されていないが、家畜動物であるネコ・イヌ・アルパカ・ヒツジからの検出は、地域での獲得を示唆している。
96	アメリカトリパノソーマ症	Transfusion 49 (supplement); 2009 (AABB Annual Meeting and TXPO; 2009 October 24-27)	米国の血液供給におけるT.cruzi (Trypanosoma cruzi)スクリーニングの費用対効果についての報告である。米国の供血血液の75-80%にT.cruziスクリーニング検査が行われており、29,000名当たり1名が陽性と考えられる。本報告では、T.cruziの脅威とその制圧にかかる費用を評価するために、異なるスクリーニング条件下で受血者の仮想コホートを設定し、生涯コストと健康に関する結果を比較するために、病気進行モデリングを用いた。7つの供血者もしくは献血検査の方法を分析し、スクリーニングしない場合と比較した。その結果、モデルにおいて最も影響のあるパラメーターは輸血された患者層の特徴と関連しており、生存率、健康状態一般(utility)および将来の健康状態の低下率である。T.cruziに関しては、血清陽性率および伝播効率が最も影響している。本分析は、選択的なT.cruziスクリーニングは全数検査とほぼ同等の効果があり、低コストであることを提示している。

97	ベスノイチア症	FESA Journal 2010; 8(2); 1499	EFSA ( European Food Safety Authority: 欧州食品安全機関)は動物の健康および福祉に関する委員会 (Panel on AHAW)にbovine besnoitiosis (ベスノイチア症)に関する科学的見解を報告するよう求めた。最近の疫学的データは、EU加盟国内の畜牛群に besnoitiosisの症例数増加および地理的広がりを裏付けており、bovine besnoitiosisは EUにおいて新興疾患と考えられる。しかし、bovine besnoitiosisの疫学は流行地域における感染・疾病の発病率・発生率、感染のルートおよび感染・疾病に関連したリスクファクターについて不明のままである。感染は、嚢胞を形成するアピコンプレックス寄生虫 <i>Besnoitia besnoiti</i> によって引き起こされ、急性期および慢性期の両方で深刻な有害事象を起こす。委員会はこの疾病について、特に農場主および獣医師に、臨床症状および伝播ルートについて注意喚起する重要性を強調している。欧州での感染地域における疫学調査は、感染動物の重要性および伝播ルートの解明を必要としている。疫学および疾病診断の進歩に関係した未回答の疑問に答えるためには、診断手段が更に発展し標準化される必要がある。besnoitiosisをコントロールするための適切な手段および戦略は有効な疫学的情報を用いて調査される必要がある。
98	Q熱	AABB Weekly Report 2010 March 19	オランダの血液バンクはオランダ国内で予想されるQ熱の2010年アウトブレイクに対する準備を行っている。疾病対策センターからの声明によると、11月25日現在、2009年のオランダでは6死亡例を含む2,293症例が確認された。オランダ国内で血液バンク業務を担当しているSanquinは、Q熱流行の期間、高リスク地域からの供血血液をスクリーニングするNAT(nucleic acid amplification testing)検査を実施予定である。2009年8月に <i>Transfusion</i> 誌のsupplementにQ熱、 <i>Coxiella burnetii</i> を含めた病原菌のファクトシートが掲載されたが、AABB's <i>Transfusion Transmitted Diseases Committee</i> はファクトシート更新のためにオランダからのデータを使用する予定である。
99	バベシア症	ABC Newsletter #41; 4-5; 2009 November 13	ARC (American Red Cross)は、バベシア症の拡大報告を受け、米国7州での供血検査の実施を提案している。近く <i>Transfusion</i> 誌に掲載予定の研究報告3報では、1.供血血液の <i>Babesia microti</i> に対するIgG抗体を調査した結果、コネチカット州およびマサチューセッツ州で広範囲な拡大が確認され、2. ロードアイランド州における輸血を介した感染の広がりを特定し、3. 2005-2007年にARCのHemovigilance Programに報告されたTTB (transfusion-transmitted babesiosis)症例の分析が成された。これらの報告は、バベシア症およびTTBが増加している危険性への懸念が強調されており、ARCは感染地域での供血血液検査を行う2つの提案を作成した。まずコネチカット州でIFA(immunofluorescence assay)による(全血献血された)供血血液検査、陽性供血者の供血延期などを行い、この結果次第ではあるが、他の6州でも検査範囲を広げる予定である。バベシア症はIxodes属のマダニによって伝播し、大部分の感染者は無症候か軽症で何ヶ月も続く可能性がある。現在、FDAが認可した検査方法はなく、寄生虫保有者が供血した場合、受血者への輸血を介した感染の可能性はある。
100	マラリア	CDC/MMWR 2010 March 5	2010年1月12日にマグニチュード7.0の大地震がハイチを襲い、20万人が亡くなり、50万人が家を失った。 <i>Plasmodium falciparum</i> によるマラリアがハイチでは流行しており、屋外でマラリアに感染するリスクが広がっている。米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)は11例の <i>P.falciparum</i> によるマラリア確定症例の報告を受け、このうち7例は米国籍であった。本報告では、この11症例の概要およびハイチへ旅行するヒトへの適切な化学療法によるマラリア予防についての推奨が報告されている。
101	繊毛虫症	Am. J. Trop.Med. Hyg. 81(2); 313-316; 2009	繊毛虫症における心合併症: 左心室血栓症の3例目の症例報告である。ルーマニアにおいて42歳女性が発熱・悪寒・悪心・嘔吐・疲労・筋肉痛・全身筋力低下により入院したが、これらは調理不十分な豚肉を食べた3週間後に現れ、豚肉には繊毛虫の感染が確認された。検査の結果は、繊毛虫症を示唆する軽度の白血球増加症・炎症・軽度の肝臓および筋肉の細胞融解性症候群を示した。心エコーは心尖部の運動低下および血栓様の心尖腫瘤を示し、繊毛虫抗原を調べる免疫学的検査は陽性であった。治療後の結果は良好であり、軽度の心電図変化が残る程度であった。
102	その他	BBC News (2009 September 21)	スコットランド全域で若い畜牛が死亡する原因不明の疾病の調査が行われている。これまでに、18農場から25例が1ヶ月齢未満の動物が罹患する出血性仔牛症候群 (Bleeding Calf Syndrome)と確定された。SAC (Scottish Agricultural College)の専門家は、ほとんど未知であるが、これまでに死に至る病気の急増は説明されていないと報告した。罹患した畜牛は発熱が続き、開口部および内部出血に至る。病気の原因は不明であるが、中毒、遺伝的異常および薬物反応が考えられている。イングランドおよびウェールズにおいても同様の例数が特定されているが、乳牛群のみに検出されている。